ラカン派精神分析における〈無意識と言葉〉

大林繁樹

一

「無意識は言語（ランガージュ）のように構造化されている」とジャック・ラカンはしばしば語っている。これはどういう意味だろうか。日常の言語活動に見られる構造と全く同じものが、無意識において働いているということだろうか、あるいは、意識の次元に無数に漂う言葉の裏側に、はるかな過去に忘れられ置き去りにされた言葉が無意識を形成し、人間を〈無意識的に〉支配しているということだろうか。

ともあれ、こうした疑問を解明し、ラカンとその弟子たちの所説を究明することがこの小論の目的である。

その第一歩として、まずフロイトの〈無意識〉をめぐる論文を概観し、無意識の形成のメカニズムを明らかにしたい。次にフロイトと比較しつつ、言葉を強調するラカン派の説を検討し、最後に、無意識と言葉とが密接な関係にある〈フィリップの夢〉の分析を検討してゆきたい。

二

フロイトは、『無意識について』という論文において、精神分析の過程で患者の症状の原因となっている抑圧を取り除こうとして、それに失敗することがあるが、その失敗の理由と分析過程の様子について次のように述べている。

「もし私がひとりの患者に、患者が以前に抑圧した表象を、私が推測したうえでつたえるとすると、最初のうちは、彼の精神状態には少しも変化がない。なかんずく抑圧はやまない。以前には意識されなかった表象が、こんどは意識されたのだから、抑圧の結果である症状も後退するものと、おそらく期待されるであろうが、それも起こらない。反対に、ただ抑圧された表象をあらためて拒否することになるであろう。けれどもいまは、患者はじっさいにおなじ表象を二様の形式で彼の心の装置のちがった箇所にもつことになる。第一に、私の話により、表象の聴覚的痕跡を意識して思いだしているし、第二に、それとならんで、われわれには確実に明らかなのだが、かって体験したものの無意識の記憶を、むかしの形式で内にひめている。じっさい、意識された表象が、抵抗を克服して無意識の記憶の痕跡と結合するまでは、抑圧はやまないのである(1)」

要するにここで問題なのは、同一の表象の二様の形式、つまり、分析者によって与えられた〈意識した表象〉と、昔の形式で内にひめられた〈無意識の表象〉との相違である。では、無意識を構成する意識されない表象、その形式とはどのようなものであろうか。これについてフロイトは次のように説明している。

「いまとつぜんわれわれは、意識される表象が何によって意識されない表象から区別されるかがわかると思う。両者は、われわれが考えたように、異なった心理的な場所における同一の内容の異なった記載ではなく、またおなじ場所における異なった機能的な充当の状態でもなく、意識される表象は、事物表象とそれに属する言語表象とをふくみ、無意識の表象はたんに事物

表象だけなのである。[2]」

それ故、抑圧の解除は、言葉を通して無意識の事物表象にできる限り接近することによって成立する。これは、夢解釈による治療において、夢の顕在内容の諸要素を出発点とする自由連想によって、抑圧された表象に近づくのと同様である。

ところで、今まで無意識、抑圧という語を何の説明もなく使用してきたが、以後重要なキー・ワードとなるので、この二語と共に、前意識—意識系、原抑圧、二次的抑圧、欲動の表象という他のキー・ワードをもう少し詳して見ておきたい。

『抑圧』という論文の中でフロイトは、二種類の抑圧を区別している。第一段階の抑圧は原抑圧と呼ばれ、これは、「欲動の心理的（表象的）な代表が意識の中に入り込むのを拒否する[3]」ことである。この抑圧された欲動の代表は、それ以後無意識において不変のまま存続する。今、無意識において、と言ったが、厳密に言えば、無意識は抑圧された欲動の代表によって構成されるのであり、原抑圧以前には無意識は存在しないと言える。

欲動（pulsion）という語も、欲求（besoin）、欲望（désir）という語と区別されねばならない。欲動の定義はひじょうに複雑であるが、フロイトが性欲論の展開の中でこの概念を発展させていったことからわかるように、簡単には、性欲（性感領域）に結びついた力動過程と定義できる[4]。この欲動についてもう一つ注意すべき事柄がある。

「欲動は、意識の対象とはなりえない。ただ欲動をあらわしているところの表象だけが、意識の対象となりうるのである。けれども欲動は、無意識のうちにあっても、表象によってあらわされるしかない。欲動が表象に付着するか、あるいは一つの感情状態としてあらわれるかしなければ、欲動についてはなにも知ることができないであろう。[5]」

第二段階目の抑圧とは、今のべた原抑圧によって抑圧された代表から発生する様々な派生物に関係するか、あるいは、「起源は別だがその代表と結びついてしまうような関係にある思考傾向に関連[6]」している。つまりこの二次的抑圧は、原抑圧によって抑圧された心理的代表の派生物が、いわば偽装によって前意識―意識系の検閲を破って意識に達しようとする時、それを阻止するべく前意識系においてなされるのである。

先に述べた、フロイトの言う無意識を構成する〈事物表象〉とは、右に見てきた、抑圧された欲動の心的代表のことである。ところで、言葉と無意識との関係という側面から見るとき、フロイトの定義においては、この〈事物表象〉と言語的要素との結びつきは一切ないように見える。A・ルメールも指摘しているように、この点についてフロイトの考えそのものが一定していないように思える。なぜなら、一方では夢のような無意識の形成物の分析において、思考や概念やイメージの無意識的な交錯としてその形成物を語っており、他方、言葉と密接に関係する、度忘れ、言い間違い等の現象については、言語記号のシニフィアンの無意識的な動き、無意識に影響されたシニフィアンの自立的な動きについて語っているからだ[7]。

この点に関して、ラカンやその弟子たちは、無意識を構成するものとして、言葉を強調する。とくにラプランシュやルクレールは、音素、あるいは音素群にまで遡って無意識とのつながりを究明している。一方、ラカンの方は『エクリ』の中では、直接には音素にまで言及していないが、言葉の習得と無意識の成立との関連を何度も強調している。

次に我々は、フロイトが観察した、ある幼児の遊びの例を通して[8]、欲動、その心的代表、ことばの出現、抑圧、無意識の形成などについて具体的に見てゆきたい。この例は、フロイトを論じるほとんどの著者によって取り上げられている特筆大書すべきもので、生産的思考を触発するものとして、様々な解釈が下されている。

三

フロイトが観察したその幼児は、生後一年六ヶ月の男児で、当時ごくわずかの明瞭な言葉を話し、そのほかは身近な者だけに理解される、いくつかの意味のある音声をあやつっていた。フロイトはこの幼児の両親と起居を共にして、数週間にわたって観察を続けた。母親はこの幼児を何時間も一人きりにしておくことがよくあったが、その際、その幼児は何でも手に入る身近なものを、部屋の隅やベッドの下などに遠くほうり投げる癖があった。ある日フロイトは、幼児がひものついた糸巻きで遊んでいる現場を目撃した。その時幼児は、ひもの端をもちながら蔽いをかけた自分のベッドのへりごしに、その糸巻きを巧みに投げこんだ。糸巻きが姿を消すと幼児は、高く引っぱった≪オーオーオー≫という声を発し、ひもを引っぱって糸巻きが出てくると、≪ダー≫(Da, いた)という言葉で迎えるのだった。この場合、前者の叫び声が単なる間投詞ではなく、Fort(いない)を表すものだとたやすく解釈された。

フロイトによれば、この遊びは、「母親が立ち去るのを、さからわずに許すという欲動放棄(欲動満足に対する断念)」の意味をもっていたのである。〈欲動満足の断念〉、これを裏返しに考えれば、オーとアー(オーオーオーとダー)という二つの音素は、不可分の対立する一対として、「母親にそばに居て欲しい」という意味を伝えていると解することもできる。

オーとアーの一対が伝えるこの意味は、いわば幼児の私的な無意識的意味であり、一方、大人の観察者にとっては、オーとアーは、Fort(いない)、Da(いた)に結びついた文字通りの意味でしかない。要するに幼児の発する音には、大人の解する日常的な意味としての文字通りの意味と、私的な意味、換言すれば、幼児の欲動に結びついた個

人的意味とがあると考えられる。極端に考えれば、母親に常にそばに居てほしいと欲しながらも、母親の在、不在を、想像の中で糸巻きの在、不在に象徴化したこの状況において、糸巻きの消失と出現に結びつけられる幼児の叫び声は、どんな音でもよかったであろう。ともあれ、フロイトの言うようにこの幼児は、母親の不在というつらい体験（受動的体験）を、糸巻きの消失と出現に置きかえることによって、能動的に克服、支配しているのである。

ところで、この糸巻き遊びは、その置きかえ行為（象徴化）そのものによって抑圧を成立させているのである。なぜなら、その時幼児は、母親との一体化という欲動の即座の満足を断念する訳であるが、彼の欲動は母親の代りに置きかえられた糸巻きにはけ口を求め、この代理行為は主体の真の欲動を、その真の目標とは異なった他の目標にそらしているからである。いわば主体の知らぬ間に、象徴化による抑圧がなされているのである。

ここで注意しなければならないことは、前に見た抑圧と抑圧されるものとの関係である。つまり、抑圧の対象となるのは、直接には欲動そのものではなく、欲動の心的代表であるという定義。右の糸巻き遊びの例では、欲動はその真の対象からそらされる訳であるが、直接に抑圧されるのは、その欲動が結びつく心的代表なのである。では、抑圧され無意識を構成するその代表とは、この場合何であろうか。

糸巻き遊びを解説している論文の中では、A・ルメールの論文がもっとも詳しいものの一つであるが、この点についてルメールは、何度か見解の修正を経ながら、最終的にはルクレール、スタインの意見に同意している。例えばルメールはスタインの次のような意見を引用している。

「スタインによれば、原抑圧によって、そしてまた隠喩の機制に従って象徴体系に入るということは、子供をその母へ向かわせる欲動の充足と空虚とを暗に含むようなんらかの一対の音素に支えられる、という。スタインが述べているような機制においては、欲動の代表（音素）は、意識に入り込むことを拒絶されて、この同じ過程によって構成された無意識のなかに欲

動とともに固定されることになるであろう。スタインはさらに続けて、これらの音素はもっと後になると、言説の断片のなかに位置を見出し、そこからさらに幻想のなかに座を占めていくであろう、と言っている。[9]」

これは全く驚くべき意見である。スタインの解釈は、原抑圧についてのフロイトの定義、欲動の心的代表が意識の中に受け入れられるのを拒否されること、という定義にそのまま沿ってなされているのだが、フロイト自身は、心的代表が音素でもあり得るという可能性については何も述べていない。ただ、夢分析の中で、夢では言葉がモノのように扱われるとか、あるいは、度忘れや言い間違いの分析の中で、言葉の自立的（無意識的）な動きを語っているのは事実である。ラプランシュとポンタリスの精神分析用語辞典では、心的代表の内容として、経験、イマーゴ、幻想という語があげられているだけだが、スタイン、ルクレールなどは、この〈経験〉の中に、とりわけ音素、音素群、そして言葉の経験を含ませている訳である。

ラカンも糸巻き遊びの例について何度か言及している。だがラカンの場合、この遊びの分析の中で彼が強調するのは、無意識を構成するものとしての音素という側面ではなく、〈オー・アー〉から〈Fort・Da〉への移行による象徴界（言語秩序）への主体の移動と、そうした言葉の誕生に密接に結びついた無意識の成立という側面である。

ラカンはこの遊びを、象徴を介して「欲望が人間化される瞬間が、同時に幼児が言語へと生まれる瞬間でもある」と解釈しており、そして次のように語っている。

「我々が今やそこに見てとることができるのは、主体（幼児）がそこで自分自身の喪失の試錬をみずから引受けることによってこれを克服するのみならず、そこで主体がその欲望を第二の力（象徴の次元）へと引き上げることである。というのも、彼の行動は、対象の不在と存在を先取りする挑発のうちに、出現させたり消滅させたりする対象を破壊してしまうのだから。彼の行動はこうして、欲望の諸力からなる場を否定し、自分にとってみずからに固有の対象となる。[10]」

要するに、幼児にとって快の源泉である母親の身体に対する想像的一体化という〈欲望の諸力〉は、糸巻きに象徴化された母親の身体を反復的に放り投げること（対象の破壊）を通して否定される。換言すれば、欲望は現実（母親の身体）のレベルから象徴のレベルに移される訳であるが、この移動―象徴化そのものによって欲望は疎外（抑圧）されると言える。そして幼児が漸次はっきりと発するようになる言葉（例えば、Fort・Da）はこの象徴化、ということは欲望の抑圧を決定的なものにする。この辺の事情について、A・ルメールのわかりやすい解釈を上げておこう。

「子供は、自分の欲求を一定の運動によってなんらかの形に移し換えつつ、そうした運動のなかで、その欲求を記号表現（シニフィアン）に引き渡してしまい、自分の最初の真実を裏切るのである。欠如・欲求・欲動などの現実の対象は永久に失われてしまい、無意識のなかに投げ込まれてしまうのである。主体は、その無意識の真実と、こうした真実を部分的に反映する意識的なことばとに二分される。[3]」

右の文中の、「その欲求を記号表現に引き渡す」という言葉は、先に述べた象徴化による欲望の疎外、とほぼ同じ意味であるが、欲求あるいは欲動の記号表現への引き渡しは、言葉の習得と共に始まる。

ここで注意すべきことは、言葉の習得に関する一般の見方とラカンのそれとの大きな違いである。一般には、子供にとって言葉の習得は家族、社会の一員として自立し成長していく上で不可欠なものであり、また、習得された言葉を通して子供は、自己の欲望を他者に伝え実現してゆくと考えられている。ラカンにおいても、もちろんこうした見方はある面では真実である。しかしラカンの思想において独特なのは、言葉と欲動、欲望との関係についての見方である。一般に、言葉による欲望の実現という場合の〈欲望〉とは、ラカンによればそれは、いわば真実の欲望の変形されたもの、ルメールの言葉を借りれば、「自分の最初の真実」から遠ざかり偽装された、社会化された欲望なのである。個人の社会化とは、この最初の真実、あるいは欲動の世界からの分裂であり、言葉がこの分裂の最初の契機と

なる。言葉以前の混沌たる世界に生きていた幼児は、言葉の習得によって言語秩序の歯車の中に引きこまれてゆく訳であるが、その過程は、いわば〈存在としての私〉と〈意味としての私〉とが無限に分裂してゆく過程でもある。

ラカンは人間の根元的な分裂を三つのレベルにおいて区別している。これをA・ルメールの言葉に依って次に整理してみよう[12]。

第一の分裂は、「無意識の要素的な記号表現と、主体がことばを習得する前の想像界との間。」

第二の分裂は、「意識のことばと無意識のことばとの間ではたらく。この分裂は、主体は自己が無意識として存るところのものへ徐々に遡ってゆく、という意味においてきわめて不安定なものである。」

第三の分裂は、意識における言葉のレベルで、「記号表現と記号内容との間に、すなわち、記号表現と思考(内容)の間に」ある。

第一のレベルについては、前に見た糸巻き遊びの幼児の例を思い出していただきたい。〈オー・アー〉あるいは〈Fort・Da〉は、想像界から象徴界への分裂による移行を示している。

第二のレベルの意味するところは、前に少し述べておいた、ある言葉に対してもつ主体の私的な意味(無意識的な意味)と、その言葉の文字通りの一般的意味との乖離である。ルメールによれば、「話すことを学びつつある子供において観察されうる慣習的なことばの起源において、そうしたことば(ランガージュ)のある種の記号が、私的な意味作用あるいは精神分析的な文脈を引き受ける、という事態が起こりうるのである。我々の見るところでは、このとき、この言語記号は抑圧を受けるのである。にもかかわらず、それは、日常の用法の中には存続しており、ただその外傷的な重荷だけが引きおろされているのである。[13]」

この第二のレベルについては、少し後で、〈ハンスの症例〉にもとづいて具体的に見てゆきたい。

第三のレベルで問題となっているのは、語の多義性である。ラカンはしばしば、記号内容に対する記号表現の自立性を強調しているが、その意味は例えば、ある言表においてその言わんとする意味内容は、最後の一語を待って初めて了解される訳であり、その過程においては、各語は自己の多義と共に自立し、最後の一語による意味づけを待っているということである。それ故、語のレベルでも、文章、言表のレベルでもシニフィアンとシニフィエとは乖離しているのである。精神分析の過程は、この未完了の一文に喩えることができる。分析において探し求められている隠された内容、シニフィエ（意味内容―病原）は分析の完了と共に現われるからだ。完了に至るまでの過程における患者の言葉は、その多義性によって、最終的な真のシニフィエに達することがないと言える。

先ほどふれておいた第二の分裂における具体例を、〈ハンスの症例〉を通して検討してみよう。この症例は、『ある五才男児の恐怖症分析』[04]において報告されたものである。

五才になるハンスの恐怖症は、「表通りで馬に噛まれそうだ」という不安と恐怖によって始まる。この恐怖のためにハンスは家から一歩出ることさえ拒否するようになる。分析が進むにつれて、この恐怖症の原因が明らかにされてゆくのであるが、その直接の原因としてフロイトは、こうした症例の場合いつもそうであるように、母親への愛着、一体化願望と、それを阻む父親に対する敵対感情との複合したものについて語っている。

ハンスのような年令の子供が思いえがく、自己と父母との関係についての無意識的な空想として、ハンスが深夜、自分の部屋で一人目ざめた時思いえがいた、暗示にみちた空想を次にあげてみよう。

「夜、大きなキリンとぐしゃぐしゃのキリンが部屋にいたの。ぐしゃぐしゃのをぼくがとったので、大きいほうがほえたの。それから大きいキリンがほえるのをやめたので、ぼくはぐしゃぐしゃのキリンの上にのっかったんだ。[03]」

〈大きなキリン〉は父親であり、〈ぐしゃぐしゃのキリン〉は母親なのであるが、ハンス自身はこの象徴化に気づいていない。この空想には、母親を父親から奪い占有したい願望と、その願望を阻む父親の抵抗に対する勝利感（「大きなキリンがほえるのをやめた」）があるのである。だが、こうした空想は、願望充足が行われていないからこそ現われてくる訳であり、その意味でこの空想は、母親はいつも父親を選んで（寝室を共にする）、自分を嫌っているのではないだろうかという不安感の裏返しでもある、とフロイトは指摘している。そして、この不安感は父親が原因であり、無意識的には父親の消滅、不在を望んでいるのであるが、この悪しき願望が父親に知れれば自分は罰されるだろうという不安が〈馬に噛まれる〉という恐怖に結びついている訳である。

こういう次第で、ある時から父親はハンスによって無意識的に〈馬〉に置きかえられる。しかし、他の動物ではなくて、なぜとくに〈馬〉なのだろうか。この点についてフロイトは次のように語っている。

「それは（恐怖症の意図と内容）、とくに母親に対して向けられようとしていた暗い運動衝動に対する強力な反動なのである。馬はこの少年にとってつねに運動欲の手本であった（「ぼくは若い馬なんだ」とハンスは跳びはねながらいう）。しかしこの運動欲は性交欲動を含んでいるので、運動欲は神経症によって抑制され、馬が恐怖の象徴に高められるのである。[14]」

もちろん、この運動欲の抑制には父親の存在が介入している訳である。つまり先に見たように、欲動の解放に対する父親の懲罰への恐れが、馬への恐怖でもある訳である。〈馬〉という一点において、欲動の抑圧と父の姿が結びつく。

今まで見てきた、父親をめぐるハンスの無意識的な心の動きを、この小論の初めに述べた、抑圧されるのは欲動の心的代表であり、その代表に欲動が結びつくという文脈と、ラカンの言う第二の分裂における、意識の言葉と無意識

の言葉との分裂という文脈から見るとどうなるであろうか。

ハンスの場合、父に対するコンプレックス（敵対感、嫉妬心、攻撃的欲動）は、馬に象徴化された。ではこの場合、欲動（母への欲動、父への攻撃的欲動など）の心的代表として抑圧されたものは何か。それは、父のあるイメージであり、それと同時に、そのイメージに結びついた〈馬〉という言葉である。というのも、少年ハンスは、いわば習得したばかりの数少い言葉しかもちあわせていない訳で、この段階では、一つ一つの言葉は想像に染まっており、〈父の姿〉は私的な意味にみちた言葉、例えば、キリン、馬で考えるしかないと言えるからである。

結局、真に抑圧されたのは、父のあるイメージであるが、ハンスにとって、右の理由から、そのイメージに結びついた馬という言葉が、それと共に心的代表として抑圧され、それが無意識裡に症状を形成してゆくと考えられる。

換言すれば、父のあるイメージは〈馬〉、馬という言葉におけるシニフィアンと同時にシニフィエに結びつけられる。この場合、シニフィエは、通常の意味内容から逸脱している限りにおいて、ハンスにとっては、私的な意味をもったシニフィエであり、シニフィアンとしての音もその私的な意味に結びついている。この私的な意味を担ったシニフィアンは、抑圧された心的代表として無意識を構成し、無意識系において様々な作用、幻想を生み出す。人間の分裂についての第二のレベルの所で引用した、A・ルメールの文章の意味は以上のように解することができる。

五

我々は次に、ルクレールが報告しているある夢の分析を通して、今まで見てきた事柄、欲動と心的代表、無意識を

構成するシニフィアンの私的な意味、シニフィアンの自立的な動きなどをさらに詳しく検討することによってこの小論の結びとしたい。この夢は、ルクレールの患者であった、フィリップというおよそ三十才の強迫神経症者の〈一角獣〉(licorne) の夢である。夢の内容は次のようなものである。

「小さな町の人気のない広場、異様な場所。私は何かを探している。素足で、リリアーヌが現われるが、彼女は私の知らない女性だ。彼女が私に言う。『こんなに小粒の砂を見るのは久しぶりだわ。』

私たちは森の中にいる。木々は奇妙に彩られていて、強烈で簡潔な色調をしている。私はこの森にはたくさんの動物がいると考える。そして私がまさにそれを口にしようとしたとき、一頭の一角獣が私たちのいる道を横切る。私たちは三者そろって下方に見える林間の空地に向かって歩いて行く。[87]」

一角獣の出現を除けば何の変哲もない夢である。患者の語るところによると、この夢から間もなくして、のどの渇きで目覚めたという。夢は欲望の充足である、というフロイトの定義からすれば、この夢は飲みたい欲望をそれなりに満たしていると言える。というのは、「林間の空地」に水を飲みに行こうとしていたのだと考えることもできるからだ。しかし、ルクレールによれば、その飲みたい欲望は単に偶発的なのどの渇きに還元してしまう訳にはいかないものである。こうして、飲みたい欲望をほのめかしている〈渇き soif〉の由来が次に探索されることになる。ルクレールは、「この飲みたい欲望はなぜ一角獣の姿の下に要約されているのか」と問題を設定している。

この解明のために、夢の顕在内容の諸要素を出発点とした自由連想法によって、幼少期の四つの思い出が明るみに出される。

その一。フィリップが三才から五才にかけて夏休みを過ごした田舎の小さな町の広場。その広場には、一角獣の噴泉があった。その噴泉から湧き出る水を飲もうとして、自分の掌を盃のようにくぼめる動作の鮮やかな記憶。

その二。五才の夏休み中におけるスイスでの森の散歩の場面。豊かに色どられたヒースと、そしてこれは特筆すべき出来ごとだが、年上の友人が掌をほら貝の形にして笛を鳴らすのをまねようとする試みが思い出される。

その三。三才の夏に、母の従姉妹であるリリー（Lili）と過ごした大西洋の浜辺の思い出。その暑い七月中フィリップは、何かにつけて重々しい訴えるような調子で絶えず、〈J'ai soif のどが渇いた〉をくりかえしたので、リリーはしまいには、二人が出合うたびに、〈Philippe, j'ai soif ?〉と彼に呼びかけるようになった。その後数年の間、この言い方が共犯の挨拶、二人が再認し合う記号となった。

その四。一角獣の噴泉のある町はずれにある、岩に刻まれた馬の足跡の思い出。少年フィリップはその足跡を好み、素足で歩くことによって、足裏の皮を角（corne）のように硬くしようと努力したことがある。ある程度彼はそれに成功する。これによって、彼は傷つくことのない革の覆いに守られた身体を保持したいという偏執的な幻想を、部分的に実現したのである。

以上の分析から、フィリップの無意識において執拗な力を発揮し続けているものとして、〈ほら貝の形に合わされた両手のイメージ〉、〈Lili〉、〈J'ai soif〉、〈corne〉などが取り出される。これらの無意識の要素は、前に述べたように、欲動が結びついた心的代表であり、抑圧によって無意識を構成したものである。従ってこうした分析からルクレールは、夢の原動力としての、無意識的な飲みたい欲望、渇きは、リリーに向けられた欲望を指し示していると見ている。

ほら貝（盃）の形に合わされた両手は、「乳房の凸面に対する凹面状の模写、その始源的意味において一つのシンボルであるものの模倣的再生産である。それはフィリップが自分の欲望の何かを実現する支配的動作なのである。[19]」

夢に現われた女性、リリアーヌ（Liliane）は、夢の前日に森を一緒に散歩したAnneと、そして先にふれたLiliと

が結合したものである。そして一角獣（licorne）は、フィリップの欲望の象徴そのもの、Lili と corne との一体化としての、リリーとの一体化の欲望そのものを実現している、と解釈される。言うまでもなく、corne は、先に見たように、ファロス（phallus）であることというフィリップの幼少期の幻想につながっている。

フロイトは夢が形成されるメカニズム、あるいは無意識の機制として、圧縮と置き換えという二つの機制を指摘したが、ラカン派精神分析では、この各々は、言語活動の二大機能としての隠喩と換喩に結びつけられた。右に見た夢でも、もちろんこのメカニズムは見られる。Liliane' Licorne は二つの要素の圧縮されたものであるが、他方、ルクレールは、一角獣自体は、フィリップの欲望の換喩（置き換え）であると言う。そしてまた、夢に現われた広場（place）は、潜在内容としての浜辺（plage）の隠喩過程による移動なのである。

ラカンの説く隠喩、換喩の働きについてここで詳しく論じる余裕はないが、要するにラカンが、「無意識は言語のように構造化されている」、あるいは、「ことばが無意識の条件である」と言う時、問題になっているのは、圧縮、置き換えという機制に従って、無意識を構成する記号表現があたかも自立的な運動をするかのように作用している様相なのである。

今、記号表現という言葉にふれたが、ラカンにおいては、言語的な記号表現とそうでないものとが含まれている。ルクレールなどもラカンの見方と多くの面で同じであるが、しかしルクレールが強調するのはむしろ、言語的な記号表現、とくに音素と欲動との結びつきである。

フィリップの夢の分析において、ルクレールは無意識の構成要素として、Lili–soif–plage–trace–peau–pied–corne という一連の語を挙げている。A・ルメールによれば、ルクレールにとってはこうした語は、無意識の中にその最も基本的かつ最も要素的な形で、その地位を見出してはいないものなのである。要素的な無意識はむしろ音素、音素群

から成っており、その音素群が次の語の構成に参与し、さらに無意識の幻想の構成にも参与し、そしてこの無意識の幻想は、全体の構築の中で、より分析されやすい無意識の地層を形成すると考えられている。

こうした音素群の例として、ルクレールは精神分析においてこうしたひそかな言い回しの告白を引き出すのはまれなことだと述べて、次のような不可思議な音のつらなりをフィリップから引き出している。

Pôor (d) j'e-li

ルクレールはこの音素群の詳細な分析を展開しているが、要するにこれらの音素は、欲動的な体験において、様々な印象と共に欲動が結びついた音（代表）であり、無意識を構成した源初的な要素なのである。音素群中の、例えば〈or〉は、それが担った様々な私的な意味と共に、先に見た夢に現われる licorne の中に反響してゆく、という次第なのである。ちなみに、フィリップの姓名は Philippe Georges Elhyani である。

註

(1) フロイト「無意識について」人文書院版著作集六、九四頁。

(2) 同右、一一一頁。

(3) フロイト「抑圧」、同右、七九頁。

(4) ここで簡単に、欲求、欲動、欲望を定義しておこう。欲求とは純粋に生物的、肉体的エネルギーであり、欲動とはこの欲求に支えられ、そこに性愛的資質の加わったものである。欲動は源初的体験において身体に記載された快への呼びかけである。欲望とは、欲求、欲動に引き続いて出現し、欲動の対象が記号表現に結晶してゆく場である。欲動―記号表現―欲望の関係については後で詳しく見る。

(5) フロイト「無意識について」人文書院版著作集六、九五頁。

(6) フロイト「抑圧」、同右、七九頁。

(7) この点については、フロイトの「日常生活の精神病理学」における〈固有名詞の度忘れ〉において初めに挙げられている〈シニョレリ〉の分析を見ていただきたい。ラカン研究家、佐々木孝次氏はこの例を『現代思想』（青土社）一八八二年六月号で詳しく論究している。

(8) フロイト「快感原則の彼岸」人文書院版著作集六、一五五頁。

(9) Anika Lemaire「ジャック・ラカン入門」誠信書房、二一〇頁。

(10) Jacques Lacan「Ecrits」, Edition du Seuil, 1966, p. 319。邦訳書、弘文堂「エクリ」I、四八五頁。

(11) Anika Lemaire「ジャック・ラカン入門」誠信書房、二三八頁。

(12) 同右、一八〇—一八一頁。

(13) 同右、一七八頁。

(14) フロイト、人文書院版著作集五、一七三頁。

(15) 同右、一九五頁。

(16) 同右、二五九頁。

(17) Serge Leclaire「Psychanalyser-Un essai sur l'ordre de l'inconscient et la pratique de la lettre」Collection Points, Seuil, 1975, p. 99.

(18) 同右、一一一頁。

——関西学院大学非常勤講師——